信毎俳壇

神野　紗希選

モノクロの春チャプリンの独裁者　（松本市）伊藤　和夫

花弁はらはら鉄板の焼きそばへ　（小諸市）加藤　陽介

山羊の仔の来る来る春の二十匹　（長野市）武田　芳子

冴えかへる手皐に換える紙おむつ　（上田市）久保　孝

茎太くこぼれ咲きなる花菜かな　（佐久市）佐藤　勝子

黄色とはこの色ですと花ミモザ　（小諸市）清水　順子

ベンハーもミモザに託す愛あらむ　（宮田村）金本　牧子

新聞で包む弁当昭和の日　（須坂市）東鳥賀代子

やまわらうずかんにしまえながのしおり　（中野市）風間　一乃

アサノミチサクラノモトヲアルクナリ　（長野市）太田　実

佳作

優先席譲る人手に花ミモザ　（小諸市）大谷　仲

並び立ち一心に祈る梅の下　（松本市）塩原　弥生

選評　一句目、チャップリンの「独裁者」は、ヒトラーへの風刺をこめたモノクロ映画だ。現代も、色彩あふれるはずの春、戦争による破壊は止まない。ファシズムの再来を人類は拒否できるか。二句目、桜の美と焼きそばの俗の邂逅。三句目、20匹のめまぐるしさが「来る来る」のリフレインで楽しく迫る。四句目、赤ちゃんも寒くないように、急いでおむつ替え。てきぱきとした日常にも確かな愛が。

坊城　俊樹選

ボサノバのオープンカフェや蝶の昼　（箕輪町）向山　政俊

降る雨の音も吸ひ込む春の土　（伊那市）小松　小夏

春光にわれも手のひらすかしみる　（長野市）長田　光弘

花だよりそっと写真に語りかけ　（千曲市）高野　郁子

真夜に醒め春寒の膝丸く撫づ　（佐久市）飯島八代恵

ファミレスの雑言愉し春の雨　（須坂市）東鳥賀代子

真清水の杓に零るる彼岸かな　（松本市）伊藤　和夫

学童の列の緩ぶや春の泥　（長野市）福沢　ナナ

真向かひに白き連峰畦を焼く　（大町市）原田　勝

名刀を心に佩いて花に侍す　（上田市）田名網　剛

佳作

見送るは忘れ案山子や鳥帰る　（佐久市）吉岡　徹

先生の木蓮を胸に卒業す　（長野市）金谷　仁世

選評　一句目、ボサノバはラテンアメリカあたりの音楽。エキゾチックな音は蝶が舞う真昼のカフェにも馴染む。季題のこんな活潑な取り合わせもあった。二句目、春の土とは草木においても豊穣の土台。雨やその音までも吸い込む柔らかさと慈愛に満ちている。三句目、春の光に掌を透かすと何が見えるのだろう。指へ流れる血管や指の骨の影も。それもまた命溢れる春の胎動ではないか。

今井　聖選

どの部屋も俳人の名や花の宿　（佐久市）西田　和彦

春風の時空を歩む余生かな　（長野市）宮沢　義親

制服の採寸の列春浅し　（佐久市）大井　基弘

何処にも漢待機の土手を焼く　（箕輪町）松沢　陸

ドーナツのおまけは薄き種袋　（長野市）鎌田　隆靖

AIの正午の鐘か入彼岸　（長野市）長田　光弘

傷の右手病める左手芹を抜く　（飯綱町）小林　紀子

三月の雨と云ふ夜泣きかな　（飯田市）神谷　車林

立春の先づ亀虫に出会ひたり　（岡谷市）吉池富貴男

薩摩芋魚籠いつぱいに詰めて来し　（駒ケ根市）服部　信彦

佳作

肥後守研ぐや暮春の日に翳し　（長野市）萩原　宏祐

休日のローマは遅しミモザ咲く　（宮田村）金本　牧子

選評　一句目、「橘の間」とか「牡丹の間」に替わり「飯田蛇笏」とか「中村草田男」のような部屋の名があればうれしい。「富安風生」の間でしだれ桜を見てみたい。二句目、余生という言葉には晩年意識が見えるが、それが「春風の時空」であれば実に明るく楽しい思いが湧く。三句目、列に目を向けるだけで新年度への緊張と期待が膨らんでくる。四句目、野焼きという春の季節感が横溢する。